

### 編輯室の内外

狂風吹々都市を搖蕩すと稱せらるる三月とはなりぬ、第七十四帝國議會も其會期の三分の二を経過す、興亞議會と稱せらるる如何なる國策に協賛し如何なる獻策を議定せしぞ、長期建設に對する犧牲は益々多きを加へ列強國の威嚇は甚しきを視る、我國不動の方針に對し何ものか妨げんとはすの喝。

嗚伏せる吳佩孚將軍老纏をひつさげて「不肯遠く古今の歴史を考へ外世界の大事を考へて一日も早く平和を圖り危急を救ふの必要なることを痛感す」と心境を語つて日支間の平和克復を唱へ救國の議を支那國民に呼びかゝることとなつた、舊臘汪兆銘は日支善隣と友好關係が極めて自然的なるは勿論甚だ必要であるから速に對日抗戦を止めよと叫んだのである、支那民衆は動搖を始めた、近き日に於て果して平和克復が實現するであらうか。

平沼首相は帝國議會に於ける施政方針演説に先ち「策を弄するは邪道である、政治の根本は道徳にある、即ち大自然の混り氣のない道徳を行ふが正しい政治である」と談話せられたが後衆議院本會議に於て「全體の爲には個人は之に従はなければならぬ自分の利害の如何に拘らざるに從つて行かなければならぬと云ふ全體主義と總ての者をしてその所を得せしむる、天下の一人もその處を得ざる者なからしむる皇道主義と

は根本思想に於て相異なるものである」と述べられた、平沼首相のイデオロギイが略ぼ察せらるるのであるが「私は徒らに聲を大にして實行の伴はぬ事を深く戒むべき事と思ふ」と貴族院で答辯して居る、政治の根本を道徳におきき不言實行主義を以て職に莅まるるのである、實に平沼人格の表現に外ならない。

大藏省で官吏洪水の調査を行ふた所十三年度に於て一般會計の判任官以上三千七百人を前十二年度より増加したとの結果を見たので今次事變の官界に及ぼしたる影響の如何にも尠少なからざるを思はしむる、之に對し根本的對策の樹立が要望されるものも無理ならぬことである。

快報、快報、海南島の占領の報は吾々國民をして愉快を極めしめたが、英佛をして有民たして愉快の念を懐かしめたところで有田外相は「我が方の海南島占領は南支沿岸封鎖を強化嚴重に蔣政權の潰滅を速かならしめんとする軍事的目的に出づるものであつて性質においても時期においても軍事的必要以上に出づるものではない、又領土的野心からかゝる行動に出でたものではない」と聲明した、英佛兩國大使は納得せられたか否か。

ローマ法王ピオ十一世は豫て宿痼の心臓喘息の爲めヴアチカン市法王廳に於て二月十日朝死去したと報せらるる儘にならぬは人命なるかなか。

平賀肅學は河合教授を休職し其對立的地位に在る土方教授を休職し以て帝大經濟學

部を再建せんことを企圖しつゝある、處が數名の教授助教は親友を消さんとし、法學部の臘山教授は親友河合教授を殉し、卒ゐて舞出經濟學部長も責任を負ふて退き田中法學部長も又其の犧牲たらんとする形勢である、平賀總長は自由思想を大用したるは貴族院の井田菊池派の獅子吼を待たず時の犧牲として已むを得ないのであらう、だが再建の學部は果して如何犧牲の功を奏し得べきか。

長岡隆一郎氏の「官僚の今昔」(中央公論三月號)を一讀すれば實に能く官僚の盛衰記とも視らるべく又官吏生活の繪巻物とも思はる、記者の如き同時代に下積役人にも終始したもの取つては今昔の感に堪えないものがある、更らに「官僚二十五年」を續けば思半ばに過ぐるものがあらう。(洗)

定價一部 五十錢  
一ケ年分 金六圓

發行所 東京市麴町區霞關一丁目内務省內  
社団法人 道路改良會  
電話銀座(57)四二七

發行兼編輯者 小島 效  
東京市世田ヶ谷區代田一丁目七八〇番

印刷所 常馨印刷所  
東京市小石川區諏訪町五六

印刷者 奈良良直 一